



第23回事例研究会概要	1
第23回事例研究会①	2
第23回事例研究会②	3
2014年総会・公開シンポジウムのご案内	4
組織及び役員一覧・事務局だより	4

環境福祉学会 事務局 株式会社環境新聞社事業部内  
〒160-0004 東京都新宿区四谷3-1-3 第1富澤ビル  
TEL. 03-3359-5349 / FAX. 03-3359-7250  
<http://www.kankyofukushi.jp/>  
E-mail: info@kankyofukushi.jp

## 環境福祉学会・第23回事例研究会概要

### 「桑を障がい者の仕事づくりに生かす」をテーマに開催

環境福祉学会・第23回事例研究会は、平成26年1月25日に東京都新宿区四谷の貸会議室において、「桑を障がい者の仕事づくりに生かす」をテーマに開催されたが、発表要旨を紹介する。

概要説明： 炭谷茂（環境福祉学会副会長）

養蚕は、大和朝廷時代に持ち込まれ、それとともに桑の栽培が盛んになったのではないかと思います。桑は日本の風土に完全に溶け込んでいると思います。桑という字を書くと、又・又・又・木と書きますように、葉っぱをどんどん育てていく大変生命力のある植物だと伺っております。ですから、日本の植生を構成するには素晴らしい植物です。

養蚕業についてですが、昭和30年代前半ぐらいまでは日本の養蚕業も持ちこたえておりましたが、その後の化繊の導入に加え中国の安い生糸の生産によって日本の養蚕業は衰退し、いまではほとんど消えてしまっているというのがご案内のとおりです。しかし、桑は日本人にとって懐かしいものの1つに入っています。日本人の感性の中に入り込んでいるのではないかと思います。ですからその桑を何かに活用できないかというのが頭の片隅にありました。そうしましたところ、現在では富山市に合併されてしまいましたが、風の盆で有名な富山県八尾町は養蚕業で発展した町で、もともと桑がたくさん育てられていましたので、その桑を活用しようとしていることを今日これからお話いただく村上先生を尋ねて知ったわけです。

また、栃木県の野木町というところで「パステル」という社会福祉法人を運営されている石橋さんが、去年、たまたま村上さんのお話をお知りになり、桑を利用してみたいというプロジェクトを考えられたということです。栃木県も養蚕の盛んだったところですが、小山市に合併されたと聞いていますが、「桑村」という桑という字の付いた町村名まであったほど養蚕業が盛んでした。したがって、石橋さんも栃木県で

も桑を何とか利用してみようとお考えになったわけです。これが第1の「桑」という視点です。

第2の視点は、環境福祉学会の「福祉」の面に該当いたします。それを障害者等の仕事づくりに活用できないかと考えております。村上さんがこれからお話いただきますが、桑を使って桑茶をつくり、障害者の仕事づくりに大変有効に活用されています。一方で、石橋さんもこれに触発され、桑をパン作りやケーキに入れていくという試みをされております。環境と福祉というのをいかに結び付けるかが、我々が勉強したいところです。

環境福祉学会の取り組みとして、障害者だけではなく、例えば高齢者の方、難病患者の方などの仕事づくりを考えますと、桑というのは可能性があると思います。あまりこれを言うと薬事法に違反しますが、桑は非常に健康によく、生活習慣病の糖尿病にいいとか、ガンに効く等いろいろ言われています。このようなことを研究されている大学もあります。健康にもいいわけですから、これをうまく利用していけば発展していくのではないかと考えております。

今日は実施段階に入っていられる2つの団体にお越しいただきました。また、農業に感心の深い方や、実際に農業をやっている方、また食品産業に携わっている方にお越し頂いておりますので、いろいろご助言をいただけるのではないかと思います。今日は事例研究会ではありますが、環境福祉学会として全国にこのような「桑プロジェクト」を広めるきっかけになればと思っております。



炭谷茂氏

## 「観光・健康・環境をとらえたまちづくり商品への取り組み—富山型・八尾風就労支援の実践—」

富山国際大学准教授／社会福祉法人フォーレスト八尾会  
村上 満 氏

桑をご紹介させていただく背景はまさに環境的な側面があり、私が住んでいる富山市八尾町のストレンクス（強み・長所）という視点を使います。桑を環境の1つのストレンクスとして我々が使い始めた背景には、「おわら風の盆」という360年の歴史を持った日本の三大盆踊りの1つがあります。8月20日から30日までの11日間かけて前夜祭を町内11の支部に分かれて行い、31日だけ抜かして、9月1日、2日、3日と本祭で盆踊りを踊ります。いまでは、2万余りの町の中のうちわずか3千人足らず、千世帯もないぐらいの集中した地域に、14日間かけて約25万人の方が訪れる、驚異的なパワーを持った盆踊りです。この踊りそのものが桑畑から出てきて、それを食べる蚕との関係が深く、300年以上の歴史を継いだ盆踊りの歌詞の中には桑が入っています。そういうお話も交えながら、健康・環境・観光を捉えたまちづくり商品への取り組みを事例としてお話しさせていただきます。

まずは、「ストレンクス」についてですが、地域の強みをどう活かすか、その人の持っている強みをどう活かすかということです。あるいは「生と活と（きときと）」という単語をキーワードにしたのですが、「生と活と」な生活を送るためにはどのようなやさしさづくりが地域に必要で、どのようなネットワークが必要なのかを考えました。そのためには地域が持っている「知恵とわざの地産地消」ではないかと思えます。お年寄りの方のこれまでの知恵や歴史から見えてきた知識、どうわざを活かすのかということを知恵者の皆さんと一緒にやりたいと思ってやってきました。

福祉事業所をつくってきたなかで、福祉が持っている能力（コンピテンシー）とは、やさしさづくりを福祉の分野から地域につくっていくことであり、あるいは速いか遅いかという勝ち負けのレースではなく、「ゆっくりズム」を提唱するのが福祉の分野だと思います。障害があっても、能率・効率は追えないけれども何かできることはあるのではないかと、あるいは人や地域の強みを引き出せる、生かせることがあるのではないかとこのことを考えながらやってきました。

我々の就労支援の1つのあり方としては、すべての障害、つまり身体、知的、精神、発達も含めて取り組む活動だということにあり、そして地域

の風土を生かします。おわらという伝統芸能や、和紙や桑で栄えてきた地場産業に着目して商店街や企業、行政と一緒に賑わいの拠点をつくり、空き店舗活用をはじめとしたまちづくり活動につなげ、独自の就労支援のネットワークを構築していくことを1つの



村上 満 氏

キーワードに掲げてやってきております。また、特区を活かし、社会福祉法人で農業に参入し、規制緩和による「スロータウン」特区で、行政が中に入ることによって法人と行政との間で個人から土地を借り入れ、そして我々が桑畑を再生することができるようになりました。それが「足谷桑園」で、自分たちだけで整備した桑園です。ほかにもいろいろな農産物もつくり、近所のおばさんたちが我々の商品を買いに来てくれます。「桑菓子屋」では桑のお菓子を売っており、桑ソフトは人気の商品です。平成18年に障害者自立支援法が本格施行したのですが、そのタイミングで、桑菓子工房を設置し、桑の葉っぱをかたどった桑せんべいの「踊り子」をつくりました。これは、おわらの踊りの形に型抜きして、その中に桑粉を入れて焼いたおせんべいで、地場産業と伝統芸能とをうまくコラボさせるといところからつくったものです。ふらっと館では、桑茶を出したり、農園ではいろいろな作業を行います。

このペットボトルは、売薬で有名な富山では老舗の会社と我々がコラボし、「おわら桑摘み茶」のペットボトル化にこぎ着けることができました。桑は又・又・又と書きますように、採っても採っても葉っぱが出てきます。ずっと続くということで非常に縁起も良いということもありますので、桑にも着目する意味があるだろうということでやり始めました。

最後になりますが、桑 de ルネッサンス協会と一緒に、八尾町の中に養蚕業で栄えた跡がどれぐらい残り、どのような遺物があるのかを練り歩き、マップに落としました。歴史を学びながら心もからだも元気になってもらいたいと、一石三鳥、四鳥ぐらいの思いをこの「まゆ街道マップ」中に落とし込んでいます。このマップの中にいくつかお店の中を載せていますが、これらのお店は桑の粉使ったお菓子の食べられるお店になります。実際にお出でいただければありがたいと思っております。

## 桑を障がい者の仕事づくりに生かす

社会福祉法人パステル常務理事  
石橋 須見江 氏

社会福祉法人パステルは平成12年に開設いたしました。最初は30人のいわゆる授産施設という障害のある方が通ってきて、何らかの仕事をして、一般社会へ出ていく目的の施設を立ち上げました。それから15年が経ちました。現在では利用者が350名と10倍になってきました。地域は茨城県、ここから3キロも行くと茨城県という栃木県のいちばん南部の小山市、そして私どもが最初に始めた野木町というふうに3つの地域に約350名の利用者がおります。

「人は働くことに生きがいを持つ」ということを柱に、「楽しく働く」、「元気に遊ぶ」、「豊かに住む」という3つの視点を取り上げ活動しています。

私たちは最初から下請けの仕事はしないと考え、自分たちで創作的な仕事をしようと考え、パンを作ったり、クッキーを作ったり、草花を植えるというところからスタートしました。そしていまは、お弁当をつくっている班、パンをつくっている班、ケーキをつくっている班、お蕎麦やうどんをつくっている班というように、いろいろな班で展開しています。

途中で、農業の中には生きる原点がたくさんあるのではないかとということに気が付き、現在、それぞれの施設で農業をやっております。例えば有機農業でニンジンをつくり、農業生産法人に納めている農業もあれば、家庭菜園のようなかたちにしてお弁当班に納めている農業もあるというように、いろいろな取り組み方をやり始めています。

しかし、農業そのものから収入を得ることは本当に大変で、収入を得るには仕組みを別にしなければなりません。そういうことで、現在、農業からニンジンやブルーベリーをつくり、そこからジャムに加工したりと、6次産業の取り組みを始めたところです。まだまだ給料を得て、利用者の自立までというところまではできないので、いま一度、私どもがやっていることを見直してみようと考えています。農業を中心として見直すということです。各施設で農業計画がきちんとできているのか、農産物を使った加工品の生産はどのようにやっているか、そして販路における営業部門はどうなのかを見直しています。品質が伴わなければ農業をやっても利用者さんのお給料は出ません。フォーレストさんはそれが成功している事例で、大変勉強になっています。

2番目は桑です。農業と6次産業で障害のある

方の良さをいろいろな面から発揮させ、障害者自立支援法ではなく、1人ひとりが生きるという視点から農業で福祉施設をやってみようと考えたときに、この「桑」が出てきました。栃木県小山市という場所はもともと桑村で、隣には絹村があり、



石橋 須見江 氏

その隣は茨城県結城市でそこが結城紬の商売をしています。結城紬は茨城県ですが、その基は桑村のある小山市です。桑村でお蚕を飼い、その隣の絹村で糸を取り、そして結城市で商売をするという流れです。現在、結城紬は世界遺産になっていますが、その世界遺産の原点はお蚕さんですから、そこを私どもの福祉とつなぎ合わせることはできないだろうかと考えました。そして桑村の畑を見ましたところ、桑畑が非常に少なくなっていてとても寂しく思ったのと同時に、世界遺産の基である桑を存続させなければいけないと思いましたので桑をテーマに選びました。

そして早速、まちの桑の組合の方に相談に行きました。そしていろいろと試作品をつくっているところです。こちらは、桑パウダーを使ったベーグルで、このシフォンケーキでは米粉を使っています。クッキーのプリントは利用者さんが描いた桑の葉のデザインで、そこにチョコレートを挟んで入れています。

社会福祉法人の地域福祉ということがよく言われますが、私どもも障害がある人たちの地域福祉とは何なのかを考えてきました。お世話される感覚は間違っているのではないかと考えていて、地域と共に働くことが地域福祉につながっていくと考えております。これからは桑を題材にして、桑地区の方々と一緒に行動しながら、私どもの法人の中で働いている人たちだけではなく、地域の高齢者や毎日は働けないけれども週に3日なら働けるといった方々など、桑を通して地域の方々も一緒に仕事ができることが私どもの地域貢献につながるのではないかと考えております。

そして、桑を中心とした農業を、できれば協力する企業体と一緒にあって農業生産法人をつくり、そして利用者がそちらに就職し、福祉法人では法人の利用者が活躍するという二本立てで仕事をすることによって、もう少し地域での循環や利用者の循環と成長の場を設定することができるのではないかと思います、これから進めていこうと考えております。



環境福祉学会

## 2014年度環境福祉学会総会及び公開シンポジウムのご案内

平成26年6月15日（日）弘済会館（東京都千代田区）にて、環境福祉学会総会及び公開シンポジウムを開催します。今回のシンポジウムのテーマは「今、食と環境福祉を考える」です。皆様のご参加をお願い申し上げます。

名称： 2014年度環境福祉学会総会及び公開シンポジウム

日時： 平成26年6月15日（日） 総 会：13時～14時

公開セミナー：14時～16時（参加無料）

開催場所： 弘済会館・4階椿（東京都千代田区麴町5-1・TEL.03-5276-0333）

定 員： 80名

内 容： 公開シンポジウム 「今、食と環境福祉を考える」

コーディネーター：

伊澤敏彦（NPO 法人環境資源開発研究所所長）

パネリスト：

炭谷 茂（恩賜財団済生会理事長 / 当学会副会長）

「概要説明」

新井利昌（埼玉福興株式会社代表取締役）

「農業を障がい者等の雇用に生かす」

安原 稔（三協興産株式会社顧問）

「食品廃棄物のリサイクル」

遠藤昌男（一般社団法人中央ライフ・サポートセンター代表理事）

「食品ロスを福祉活動で活かす」

### ■ 環境福祉学会組織役員

会 長：	江草安彦	社会福祉法人旭川荘名誉理事長 川崎医療福祉大学名誉学長
副会長：	伊藤達雄	名古屋産業大学名誉学長 鈴鹿医療科学大学客員教授
	潮谷義子	日本社会事業大学理事長 前熊本県知事
	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会理事長 元環境事務次官
理 事：	泉谷直木	アサヒグループホールディングス株式会社代表取締役社長
	植田和弘	京都大学大学院経済学研究科教授
	長田逸平	クライシスマネジメント協議会理事長
	寺田清美	東京成徳短期大学教授
	波田幸夫	環境新聞社代表取締役社長
	萩原元昭	群馬大学名誉教授
	花澤義和	NPO 法人エコリンク21環境国際総合機構理事長
	藤田八暉	久留米大学経済社会研究所所長
	松寿 庶	福祉新聞社代表取締役社長
	安川 緑	金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域准教授
監 事：	永井伸一	獨協医科大学名誉教授
	伊澤敏彦	NPO 法人環境資源開発研究所所長
事務局長：	小峰且也	環境新聞社専務取締役
事務局：	酒井 剛	環境新聞社事業部部長

### 事務局 だより

第23回的事例研究会が、1月18日（土）に、東京都内で開催されました。

「桑を障害者の仕事づくりに生かす」をテーマに、富山市と栃木の小山市での取り組みが紹介されました。富山の村上さんからは、ペットボトルの桑茶と桑のパウダー入りクッキーを、栃木の石橋さんからは、桑のパウダー入りクッキーとシフォンケーキの差し入れがありました。参加者全員、美味しく試食することができました。桑を植えることにより、耕作放棄地の改善になり、桑の葉の効用で健康になり、障がい者の方の雇いにも繋がります。三方よしという形が出来上がり、環境福祉の先進的なモデルになっていくのではないかと感じました。

▼さて、6月15日には、2014年度環境福祉学会総会及び公開シンポジウムを開催します。今回のテーマは「今、食と環境福祉を考える」です。この最終頁に概要を紹介しておりますので、ぜひご参加下さるようお願いいたします。